

日本の中のマネ 出会い 120 年のイメージ

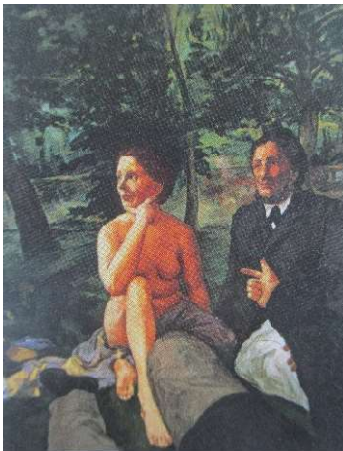
練馬区立美術館(中村橋) 2022.09.04~11.03



本展は、19世紀フランスを代表する「エドゥアール・マネ」(1832~1883)の日本における受容について考察する展覧会である。日本に所在する「マネの17点」の油彩画(パステル画を含む)のうち「7点の作品」を中心に、印象派や日本の近代洋画、そして資料「約100点」などを通して、明治から現代にかけての日本における「マネ・イメージ」に迫るユニークな企画である。

最初に現れた「マネ」へのオマージュ(賛歌)は、石井柏亭(1882~1958)の《草上の小憩》油彩/オイルバス・カンヴァス 1904年で、「マネ」の名が文献に登場するのは、「森鷗外」による著述で、絵画と批評を通し「日本におけるマネの受容」を考察している。

福田美蘭《帽子を被った男性から見た草上の二人》クリル、合板 1992年



本作品は、「マネ」の《草上の昼食》から想を得たと思われ、杉の建ち並ぶ丘を背景に自分の弟妹をモデルに描いた水彩スケッチに基づくものである。

明るい色彩と軽快で生气ある筆致を用いて、午後の暖かい日差しを浴びながら、枯草の上でくつろぐ姿を描出している画伯の最大の作品とされている。

画伯は、人物描写が済んだ後にあえて光線を強めるつもりで画面に「黄色の線」を軽く乗せたとされている。

アルフレッド・シスレー《モレのポプラ並木》油彩/カンヴァス 1888年



「シスレー」は1839年フランス生まれのイギリス人で、「モネ」や「ルノアール」とともに、印象派を形成した一人で、地味ではあるが村、川辺、田園などを生涯において描き続けた「風景画」作品が数多い。

本作は画伯の終わりの住処となったパリ郊外シュル・ロワンの風景である。